

吉野作造の遺品展 人柄や交友伝える

大崎・記念館 自筆文書や色紙など

大崎市にある吉野作造記念館の企画展示室に、吉野の遺品が並んでいる。自筆の文書など44点が伝えるのは、うわべを飾らずウィットに富む吉野の人柄と交友模様だ。28日まで。無料。

目を引くのが、野古川生のペンネームで、「吉野先生」を紹介する1925年の文章。「誤って(東京)帝国大学に奉職した。特に学徳を積んだ者でないことは言うまでもない。それは先生も知っている」。買いかぶられていることを承知しながらも、「ありのままの作造さんに戻れない」理由を家族を養うためと説明している。

紹介文をしたためたのは、肖像写真を



展示している吉野の肖像写真＝大崎市古川福沼1丁目

持参した帝大の門下生から写真に添える文書の執筆を頼まれて。この時、吉野は入院中。ジャズの即興演奏のように書いたはずの文章には、「肖像を飾ることを先生は全く望んでいない」ともある。

当時、吉野47歳。9年前に民本主義の記念碑となる論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表し、大正デモクラシーの旗手としての名声を確立していた。

自身による墨筆の額書や書軸も並ぶ。意味するのが「花も柳も、自然のままにそれぞれの個性を発揮している」「寛大でありつつも、心を引き締め、落ち着いて穏やかであれ」。書経などから引用した。

常設展示室の書軸には、「人世に逆境は無い」。併読すると、おぼろげながらも吉野像が浮かんでくる。時にはひょうきんで、世評に淡泊。自己の客観視に努める。心がけたのが泰然自若——。あの自身紹介の戯文は謙遜などではなく、本音に近かったとも読めてくる。

吉野に贈られた色紙なども並ぶ。孫文の側近だった戴季陶や辛亥革命指導者の一人、黄興らからの14点。アジアの近代化に向けた動きに共感を寄せた吉野ならではの交流を物語る。

展示品は、すべて記念館の所蔵。54点が昨秋、大崎市の文化財に指定されたのを記念して公開した。10点は以前から、入場有料の常設展示室に陳列していた。

問い合わせは、記念館(0229・23・7100)へ。(島田博)